



● 環境色彩研究会・研究発表者募集

環境色彩研究会は、2021年度研究発表会を開催し、研究発表者を下記の要領で募集しております。

◆日時：2022年2月26日（土）13~17時

◆会場：ZOOMによりオンライン開催

◆応募資格：研究著者のうち1名以上が、

1. 環境色彩研究会会員（応募時の入会可）
2. 日本色彩学会会員
3. 1と2を指導教員とする学生

◆応募方法：発表題目・研究発表趣旨・発表者名・所属・連絡先（A4版1枚以内、写真・図表は不要）を記載して提出のこと。

◆申込締切：2021年12月31日（金）必着

◆送信先：萩原京子主査まで

(kyoko.hagiwara@jp.sunstar.com)

メールタイトルを「環境色彩研究発表会 発表申込み」とすること。

※ 上記申請内容を閲覧した上で、研究発表の採否がメールにて通知されます。

◆研究会誌「環境色彩研究」に掲載予定のA4版4頁以内の発表論文原稿を提出のこと。

◆原稿締切：2022年2月1日（水）必着

◆発表形式：口頭発表またはポスター発表
口頭発表は、発表12分・質問3分を予定。

(学会メールニュースから引用)

(永田泰弘)

新刊紹介「色を分ける 色で分ける」

日高杏子著 京都大学学術出版会発行

定価：2,200円（税別） 283ページ

本書は二部構成であり、第I部は、虹、色名、順位と属性、性質による色彩の分類。第II部は、色彩の分類の普遍性と多様性。究極の軋轢—人種差別がテーマになっている。

第I部の「色を分ける編」は、虹の色の変遷にふれ、ニュートンの7色に行きつく。色名はバーリン&ケイの11色から、2009年の6基本色彩語に至る経緯が語られている。

色を原色・純色・順位・属性・色相環・色空間という基準で分ける表色系の原点が語られている。

温度・湿度・家畜・祝祭と日常・性別という「色を環境と感覚で分ける章」で、色彩文化や日常生活との関わりが理解できる。

第II部の「色で暮らしを分ける章」の、日米における牛乳と菓子のパッケージの色の違いが面白い。「色で身分を分ける章」では紋章・旧日本軍の襟章の色分け・階級・奢侈禁止令が述べられ、最後の「色で人間を分ける章」では、人種問題という重いテーマが、分析的に語られている。

本書の優れているのは、出典や事項索引が豊富に挙げられている点である。(永田泰弘)

● 季語集の中の色名—2

最初に取り上げるのは、単語の中に基本色彩語などが組み込まれた季語を選んでいきます。季節は13に分けられています。

● 早春

末黒野（すぐろの）：野焼きをした後、すすきなどが先の方だけ黒く焦げて残っている野原の様子。

末黒のすすき（すぐろのすすき）：野焼きをした後に、先の方だけ黒く焦げて残っているすすきのこと。

頬白（ほほじろ）：雀位の大きさの小鳥。二月末頃から人家近くにきて囀り始める。

白魚（しらうを）：白銀色ともいふべき魚で長さ二三寸。いかにも早春の魚らしい。**しらを・白魚網・白魚舟**。

白魚鍋（しらをなべ）：淡白な白魚のちり鍋は如何にも早春の味覚である。

白子（しらす）：かたくちいわしの稚魚で、よく白魚と混同される。**白子干・白子飯**。

草青む（くさあおむ）：萌え出た草は直ぐ青みが目立つようになる。

畦青む（あぜあおむ）：畔に草が芽吹くさま。

岸青む（きしあおむ）：岸に草が芽吹くさま。

麦青む（むぎあおむ）：麦踏の始まる頃である。

(永田泰弘)